

平成 25 年度文学研究科共同研究 研究成果報告書

申請者氏名	桑木野幸司
-------	-------

研究課題名	西欧近代における旅と風景のディスコース
-------	---------------------

研究組織

氏名	所属機関・部局・職名	専門分野
桑木野幸司	文学研究科准教授	イタリア建築・美術史
小澤京子	東京大学グローバル COE「共生のための国際哲学」 教育センター特任研究員・埼玉大学非常勤講師	フランス表象文 化・18C 美術史
北原博	北海学園大学法学部教授	ドイツ文学
服部典之	文学研究科教授	英文学
山上浩嗣	文学研究科准教授	フランス文学
吉田耕太郎	文学研究科准教授	ドイツ文学

※1行目に研究代表者（申請者）を記入してください。

※本学関係者については所属機関（「大阪大学」）は省略してください。

研究の目的・計画

本共同研究は、昨年度の共同研究の成果を発展的に継承し、「旅」についての言説分析をさらに深めることを目的とする。ヨーロッパでは17世紀から19世紀はじめまで、グランドツアーとよばれる修養旅行が行われていた。昨年度の共同研究では、英文学・独文学・仏文学・イタリア美術史の各分野から、大陸旅行をめぐるさまざまなトピックの分析が行われた。そこで浮かび上がった問題点は、当時の大陸旅行には多彩な形態や目的があり、必ずしも「グランドツアー」という語のみでは覆いきれない多様な側面が見られるということであった。

そこで本共同研究では対象を「旅」および「風景」とし、より広範な視点からのアプローチをこころみる。西欧近代（16C~19C）のヨーロッパ人たちは、「旅」すなわち未知の自然や異文化との遭遇をどのように言語化し、また異国の地で目にした「風景」あるいはカルチュラル・ランドスケープ（文化的景観）をどのようにテキストに描写していったのだろうか。この点を解明すべく、英・独・仏・伊の文学者や哲学者のテキスト（サド・ゲーテ・デカルト他）、あるいは視覚芸術や都市・庭園空間を分析し、領域横断的な近代景観論の視座を得ることを最終目標とする。近代の発展過程の中で、ヨーロッパ人が異文化をどのように理解し、またどのような態度で風景と接してきたのかを、学際的な視点から明らかにすることで、21世紀がかかえている国際紛争や環境問題にもアクチュアルな提案が可能になるものと期待される。

## 研究成果

本共同研究のメンバーは「西欧近代における旅と風景のディスクール」という共通テーマを念頭におきつつ、各専門領域において独自の課題に取り組み、2013年12月3日のワークショップ（大阪大学文学研究科）において研究の進展具合について経過報告を行った後、2014年3月4日の研究報告会（北海学園大学）において成果の発表を行った。メンバーの専門領域は英・独・仏文学、イタリア美術・建築史、フランス表象文化論・美術史とさまざまであったが、旅と風景の観念という共通項を解して、ジャンル横断的な討論を行うことができた。以下に、3月の最終研究報告会での各メンバーの発表内容を要約する。

桑木野は「十六世紀イタリアの庭園における旅と風景のモチーフ」というタイトルで報告を行った。近代的な風景観念の誕生を、イタリア人文学者ペトラルカとボッカッチョの作品のうちを確認したのち、15世紀から16世紀にかけてのイタリアのヴィッラと庭園のデザイン分析に取り組み、風景と庭園と建築が次第に創造的な仕方と融合してゆく過程を跡付けた。主な分析対象は、フィエゾレのヴィッラ・メディチ、ヴァチカンのベルヴェデーレの中庭、ローマのヴィッラ・マダーマ、ティヴォリのヴィッラ・デステである。

山上は「モンテーニュの旅と『気をそらすこと』」というタイトルで報告を行った。ドイツ・イタリアを約一年半かけて旅したモンテーニュは、旅の意義を「自己の判断の不完全さを知ること」と定めながら、「利益や兎を求めて走る者は走るのではない」、「動くことが楽しい間、動きたいだけ」と語る。この姿勢は、彼が悲しみや死の恐怖から「気をそらすこと」(diversion)を肯定する姿勢と軌を一にしている。その一方で彼は、「自己をそらさぬこと」(ne pas se distraire) (意志によって欲望や情念を制御すること)を、自己本位の生の条件であるとみなす。彼にとって、「気をそらすこと」は、自己の「判断」の形成の一環であって、「自己をそらさぬ」境地に至るための営みなのである。

小澤は「書物としての理想都市——C.-N.ルドゥ『建築論』の構造」というタイトルで報告を行った。新古典主義期のフランスの建築家 C.-N.ルドゥ (1736-1806 年) の晩年の著作『芸術・慣習・法制の下に考察された建築』(パリ、1804 年刊) では、書物としての物質的・形態的な構造、また「語り」の態様(旅行者の移動、空間描写における時間経過の感覚など)によって、仮構的な空間性が出来している。この『建築論』における空間性の特質を、同時代の書籍やテキストと比較しつつ明らかにし、あわせて「書物と空間性」、「イメージとテキスト」といったテーマティックにおける本書の意義を示した。

北原は「イニシエーションとしてのたびの舞台としての庭—『魔笛』」というタイトルで報告を行った。モーツァルトの『魔笛』の舞台イメージの分析を通して、モーツァルト時代の秘密結社での儀礼における象徴的な旅の風景を、英国風風景庭園と結びつけて考察した。初演の頃の舞台イメージには、フリーメイソンの「秘儀伝授の場としてエジプト」というイメージと結びつけられた英国風風景庭園(とりわけそこに造られた洞窟)が描き込まれているということを示した。

吉田は「旅行記にみられる都会と郊外のトポス」というタイトルで報告を行った。18世紀のヨーロッパ内における旅行の特質を明らかにするために、「都市と郊外」ないしは「都会と田舎」に相当するような、地域格差への言及を旅行記から取り上げた。同時期には都市の経済格差を扱った論文も多数出版されていることもあわせて紹介し、都市の経済的な繁栄度合いが

記録に値する情報と旅行者たちにみなされていたことを論じた。

服部は「ロマンスとポリティックスが交錯する風景―『トム・ジョーンズ』におけるジャコバイトの反乱とソファイアの遁走―」というタイトルで報告を行った。ソファイアという恋人がいるにもかかわらず放蕩＝反乱するトム・ジョーンズは、サマセットシャーの屋敷を放逐された後、ロンドンへの道行きの中、当のソファイアとすれ違う。彼女を追跡して半円形の旅を行うトムだが、途中北上するジャコバイト討伐軍に出くわして志願兵となろうとする。しかし、結局戦闘的野望は捨てて、トムは彼から遁走するソファイアを追いかけることになる。この交錯は、政治と文学の交錯を象徴しているのではないか。ロマンスと結婚の平和を最終的に選択したトムは放蕩者＝反乱者たることを放棄したのであり、この中に、王政復古劇以来のリバティーン文学の終焉が宣言されている。同時にここには、17世紀から続いたイギリスにおける反乱の時代の終焉も示されていると考えられる。

**研究発表** [①論文・書籍、②口頭発表、③研究会開催、④その他に分けて記入してください。]

※メンバーの昨年度の研究業績のうち特に本研究課題に関連の強いものを抜粋した：

**①論文・書籍**

- ・服部典之（共著）『「ガリヴァー旅行記徹底注釈」、岩波書店、2013年
- ・北原 博「パパゲーノとパミーナの試練—シカネーダーの『魔笛』続編について—」 北海学園大学『学園論集』第158号 2013年12月、1-17頁
- ・山上浩嗣「ラ・ボエシ『自発的隷従論』における「友愛」の諸相」『待兼山論叢』第47号文学篇、大阪大学大学院文学研究科、1-18頁、2014年1月
- ・エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ『自発的隷従論』、西谷修監修、山上浩嗣訳、ちくま学芸文庫、2013年11月
- ・エマニュエル・ル＝ロワ＝ラデュリ、アンドレ・ビュルギエール監修『叢書アナル 1929-2010—歴史の対象と方法』第III巻「1958-1968」、アンドレ・ビュルギエール編、浜名優美監訳、山上浩嗣ほか訳、藤原書店、2013年12月
- ・Kotaro YOSHIDA, Ein anderer Weg der Aufklärung: Christian Garves Kulturtheorie, in Teruaki Takahashi und Tilman Brosche (Hg.), *Contraste*, no.1, 2014, München, pp. 3-13.
- ・小澤京子「書物の中の理想都市：C.N.ルドゥ『建築論』の仮構的空間性」、『埼玉大学紀要（教養学部）』第49巻1号、2013年、21-36ページ
- ・桑木野幸司『叡智の建築家：記憶のロクスとしての16-17世紀の庭園、劇場、都市』、中央公論美術出版、2013年12月
- ・桑木野幸司、「庭の掟 (Lex hortorum)：初期近代イタリアにおける庭園の公開について」、『Arts and Media』、no.4、2014年3月、pp. 58-79.
- ・桑木野幸司、「天国と地獄の想起：C・ロッセッリ『人工記憶の宝庫』における視覚芸術からの影響について」、『西洋美術研究』、2013、No. 17、pp. 91-110.

**②口頭発表**

- ・吉田耕太郎 「田舎の誕生 18世紀ドイツの文化都市の形成とその余波をたどる」、文化都市形成のダイナミズム—ブレスラウ、ドレスデン、ライプツィヒから考える、京都大学、2014.03.14
- ・小澤京子「Sade, the Architect: Characteristics of the Narrative Spaces in Voyage d' Italie」第19回国際美学会、2013年7月、ヤギェヴォ大学、クラクフ（ポーランド）
- ・桑木野幸司「記憶のかたち—コスマ・ロッセッリ『人工記憶の宝庫』（1579年）における天国と地獄の表象」、国際シンポジウム「かたち 再考」—開かれた語りのために—、東京文化財研究所、2014年1月7日

④小石かつら・吉田耕太郎（共訳）ギュンター・G・バウアー『ギャンブラー・モーツァルト』春秋社、2013.

**外部資金獲得状況：**

- ・日本学術振興会：科学研究費補助金基盤研究C 研究代表者：山上浩嗣

「パスカルとモンテーニュの人間学および『ポール＝ロワイヤル論理学』の研究」

研究期間: 2014年4月 - 2017年3月

・日本学術振興会： 科学研究費補助金（若手研究B）研究代表者：小澤京子

「1780-1830年代のフランスの都市構想における「流れ」の概念について」

研究期間：2014年4月 - 2016年3月

・日本学術振興会： 科学研究費補助金（若手研究A）研究代表者：桑木野幸司

「テキストの中の建築：初期近代イタリアの芸術文化における文字、図像、空間の融合」

研究期間：2013年4月 - 2016年3月